

農業データのプラットフォーム、本格稼働

◆「農業者の経験と勘」から「データに基づく農業」への転換

農林水産省は、2019年9月、20年度予算概算要求について、「スマート農業」をさらに加速化させることを重点分野とし、政策目標のひとつに、25年までに農業の担い手のほぼ全てがデータを活用した農業を実践することを掲げた。

国は、農業者の経験と勘だけに頼るのではなく、データに基づく農業への転換をはかり、生産性効率の向上やコスト削減など農家の経営改善をはかろうとしている。そこで現在、産学官連携で進めているのが、「農業データ連携基盤」通称・WAGRI（ワグリ）だ（<https://wagri.net/>）。農業のICTが進む中、気象、土壌・農地、生育予測、市況など農業に関するデータが幅広くなった半面、それぞれデータの形式が異なり相互連携がほとんどない。WAGRIは、これらを集約・蓄積することで、データの連携・共有・提供を可能にするプラットフォームを目指す。

◆WAGRI導入で新たな可能性が広がる農業

WAGRIは、18年4月からデータプラットフォームの運用を開始し、19年9月現在、ICTサービスや農機メーカーなど385社が会員となっており、実証実験も行われている。NECソリューションイノベータは、ICTサービスと農機メーカーと協力し、トラクターの作業データを農業者同士が共有し、気象データを組み合わせて地域の技術・経営力の底上げや技術継承に取り組めるプロジェクトを進めている。

また、リモートセンシング・データを提供しているビジョンテックは、WAGRIを活用して、水稻発育システムの予測精度を効率的に改善するプロジェクトに取り組んでいる。気候温暖化等により精度の高い発育情報が求められているという。

さらにデータプラットフォームを通じて、営農管理ソフトに音声認識機能を追加することで、農業者は音声でデータの参照や作業記録の入力等を行うことができる。作業中や作業後のデータ確認や入力にかかる手間を大幅に軽減できる。

WAGRIは、19年4月に運営主体が国から農業・食品産業技術総合研究機構に移管され、本格的な運用が始まった。WAGRIが日本の農業の姿を変える農業データのプラットフォームになるか、今後の進展が大いに期待される。 【秋元真理子】